

生きてあれ冬の北斗の柄の下に  
加藤楸邨

冬は大気が澄み、一年で一番星が美しく見える季節です。雲一つない夜空を見上げると、輝く星が今にも降ってきそうな感覚に襲われます。冬を代表する星座は南の空に見えるオリオン座ですが、北の空に目を転じると、本校のシンボルである北斗七星が北極星の回りを巡っています。北斗七星は校章にも表されており、中央部の鏡と周囲に配された六つの小円がその姿を形作っています。相馬高校が掲げる高い理想の象徴である校章は、昭和23年に美術の鈴木琢磨教諭によってデザインされました。頭上に瞬く星々を眺めていると、本校の長い歴史とともに、自分が自然の中で生かされている「ちっぽけな存在」であることを痛感します。



3学期始業式が行われました

1月8日、放送により3学期始業式が行われました。私から生徒諸君に対して、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて、学校の内外において感染症対策を確実に講じることを呼びかけました。また、道元の言葉である「前後際断」について紹介し、「過去」や「未来」とは関係なく「現在」を精一杯生きること、今この時に最善を尽くすことの大切さを伝えました。まもなく3年生は卒業を迎えます。有終の美を飾り、相馬高校を巣立って行くことを心から願っています。コロナ禍が一日も早く収束し、世の中が平常に戻りますように。

おすすめ書籍



出口治朗著『人生を面白くする本物の教養』  
(幻冬舎新書)

「教養とは人生を面白くするためのツールであり、これからの時代を生き抜くための最強の武器になる」。帯紙の言葉に惹かれて購入して読んだところ、「目から鱗」。物事の考え方から人生を豊かに生きる方法まで、具体的に記されていて大変参考になりました。教養とは、知識を基礎に自分の頭で腑に落ちるまで考え抜く力であり、「本・人・旅」を通じて培うことができる。当代きっての教養人でもある著者の言葉には説得力があり、教養を身につけることの大切さを実感したところです。

パンデミック・ストッパー来る

小高産業技術高校さんから足踏み式消毒液スタンド、通称「パンデミック・ストッパー」をいただきました。これは同校機械科課題研究班の生徒さんが製作したものです。学校で使われなくなった机を再利用し、消毒液ボトルの高さに応じて取り付けが可能で、ペダルを踏むだけで触れずに手の消毒ができる優れものです。生徒の皆さんがこれまで学んだ知識と技術を生かした工夫の結晶と言えるでしょう。本校正面玄関に設置し、来客の方々に使っていただいています。紙面を借りて感謝申し上げます。



経済史学者岩本由輝先生のこと ～郷土部と生徒会活動で培われた研究者の姿勢～

1月19日より河北新報の文化欄「談(かたる)」において、経済史学者の岩本由輝(いわもと・よしてる)氏(89歳)の足跡を紹介する連載が始まりました。岩本氏は昭和28年4月に相馬高校に入学し、昭和31年3月に卒業した同窓生です。東北大学大学院を修了し、研究者の道を歩みました。山形大学教授を経て東北学院大学教授となり、現在は同大学名誉教授です。岩本氏が研究対象としたのは、戊辰戦争以来、中央の政治に翻弄されてきた東北地方の近代史。代表的な著書に「東北開発120年」「東北開発人物史」「東北地域産業史」などがあります。

岩本氏が研究を志すきっかけの一つは、相馬高校に入学して岩崎敏夫先生の指導を受けたことでした。岩崎先生も昭和2年に旧制相馬中学を卒業した同窓生で、大学卒業後に本県の国語教員になりました。太平洋戦争只中の昭和19年に相馬中学に着任し、終戦をはさんで昭和31年まで本校に在職しました。その間、昭和21年に郷土クラブ(現在の郷土部)を設立し、相馬の歴史を学ぶことを通じて、戦後の荒廃から郷里の復興を目指しました。郷土クラブには民俗、考古、歴史地理の三つの部門があり、岩崎先生の指導のもと活動を開始しました。特に相双地方の遺跡や古墳の発掘調査を精力的に行い、その成果を報告書にまとめ、資料の収集に努めました。質の高い活動は県外にも知られることとなり、東北大学、慶応大学、早稲田大学などの研

究者が来校するほどでした。

岩本氏は相高入学後、郷土クラブに所属し積極的に活動します。幼い頃から考古学に強い関心を持っており、一年生から相馬市大坪地内の弥生式住居の発掘、二年生では浪江町の前方後円墳の発掘、部長を務めた三年生では横穴古墳の壁画調査にも取り組みました。生徒の自主性を尊重する岩崎先生のもとで、岩本氏は郷土クラブの活動に熱中し、この時の経験が研究者としての原点になったようです。また、岩本氏は二年の秋に推されて生徒会長になっています。当時は男女共学や再軍備の是非が学校新聞上で討論されていた政治の季節。岩本氏は以下のように再軍備賛成の立場で論陣を張りました。

私は再軍備に絶対賛成するものであります。何となればこの複雑な世界情勢において果たしてある侵略国家が日本を攻めて来ないとは誰が保障するでしょう。

さらに当時、アメリカの水爆実験により第五福竜丸が被爆し、乗組員の久保山愛吉氏が亡くなる事件をきっかけに、相馬高校では原水爆禁止署名運動が盛り上がっていました。岩本氏は生徒会長として署名運動への対応にも追われたようです。以上のように本校での部活動と生徒会活動を通じて、岩本氏は多くのことを学び、社会を見る眼差しを磨いていったと思われます。「河北新報」の記事



## 大学入学共通テストが終了しました

1月16・17日の両日、大学入学共通テストが行われ、3年生は会場となった原町高校で受験してきました。共通テストはこれまでの大学入試センター試験の後継として導入されましたが、大学入試改革の目玉であった英語民間試験の活用や、国語・数学における記述式問題の導入が見送りとなるなど、大きな混乱がありました。入試制度の改革とその変更に加え、新型コロナウイルス感染拡大の脅威も重なって、3年生の不安や心配はいかばかりであったか。翌日、生徒たちは自己採点を行い、その結果にもとづき国立大学の個別学力検査に出願しました。前期日程は2月25日より、後期日程は3月12日より試験が始まります。受験する生徒諸君には、くれぐれも体調管理と感染症対策に留意し、万全の体制で試験に臨んで欲しいと思います。志望校合格を目指し、最後まで諦めず、粘り強く！



## 1学年SDGs発表会が行われました

1月26日から28日にかけて、1学年によるSDGs発表会が行われました。今年度も1学年は総合的な探究の時間にインベーショココースト構想に係る教育プログラムに取り組んでおり、1年のまとめとしてSDGs(持続可能な開発目標)に関連するテーマを決め、グループごとに探究学習を行いました。今回、クラスごとにその成果を発表し、全員で情報を共有して、相互に評価を行いました。地球規模の課題について探究したグループや、相馬市が抱える地域課題について探究したグループや、身近な人間社会が内包する課題について探究したグループなど幅広い視点から取り組んでいました。生徒諸君には将来にわたって様々なことに関心をもち、課題を発見し解決する姿勢と方法論を身につけて欲しいと思います。



## 令和3年度全国総文祭和歌山大会に水戸さん出展へ

このたび、今年7月に和歌山県で開催される第45回全国高等学校総合文化祭美術工芸部門作品展に、本校の水戸希々嘉さん(1年)の作品が出展されることになりました。1月22日の県高等学校文化連盟美術工芸専門部で行われた審査会において、応募作品は46校から寄せられた300点あまり。その中から6点が推薦され、そのうちの1点が水戸さんの作品でした。水戸さんは美術部に所属し、放課後、熱心に創作活動を行っており、「相高ART展」にも出展した、アクリル絵の具で仕上げた「有罪と贖罪と救済と」が高い評価を受けてました。今後の活躍を期待しています。



一番左下が水戸さんの作品(福島民友より)

## 租税教室が行われました

1月18日、進路が決定した3年生を対象に租税教室が行われました。講師に税理士の伊藤春人氏と伊藤洋子氏をお招きし、租税の歴史、税の使い道、社会に果たす税金の役割、国の歳入・歳出、我が国の財政、税金の種類、確定申告など、税金に関する幅広い話についてご講演をいただきました。租税は社会保障、福祉、教育、警察・消防・防衛、水道・道路等のインフラ整備などの財源となり、社会になくはならないものです。生徒諸君には将来よき納税者となり、社会を支える一員になって欲しいと思います。生徒たちはスライドを見ながら、熱心に耳を傾け、適宜メモを取っていました。



## 日弁連会長荒氏(本校OB)の講演

1月13日、相馬市市民会館において、日本弁護士連合会の会長である荒中(あらただし)氏の講演会が行われました。荒氏は昭和48年3月に本校理数科を卒業し、東北大学法学部に進学。大学卒業後、昭和57年に弁護士登録。その後、仙台弁護士会長、日弁連副会長・事務総長を歴任、令和2年に会長に就任されました。当日は「コロナ禍の中での日弁連の諸活動」の演題で、新型コロナウイルス感染拡大に伴って発生した様々な問題を紹介するとともに、東日本大震災後の日弁連による支援活動について講演を行いました。日本全国すべての弁護士が登録している日弁連は、弁護士の指導、連絡および監督に関する事務を行い、人権擁護と社会正義を実現するための様々な活動を行っています。同窓生が弁護士の全国的な組織の会長になられたことは、本校にとっても誇りとなる出来事です。



## 同窓生列伝②折笠晴秀(1885-1965) 続編 ~馬城会会長就任秘話~

折笠と馬城会の関わりについては、「校長通信」第2号と第3号で述べましたが、折笠の会長就任の背景を伝える資料がありましたので補足します。その資料とは、平成17年11月15日発行の「馬城会報」第35号に桜井弘佑氏が寄稿した「馬城会の歴史」です。昭和14年8月、馬城会の規約会則が改正され、校長に代わり卒業生から会長を互選することになり、折笠が初代会長に選出されたことはすでに述べました。その背景について桜井氏は次のように述べています。

『昭和十年から十二年の一月頃、当時の校長の人事の采配が悪いと地元紙に掲載させ、会員の一部の者が校長排斥の世論を巻き起こした。県で調査したところ事実無根であり、先生方からも信頼があり、生徒からも尊敬されている全く立派な校長だと、わかってその校長を栄転させた。そのもめ事を收拾するためやむなく昭和十四年から前記の様に折笠さんが会長職を引き受けたのである。』

これによれば、馬城会の会員の一部の校長排斥運動を行い、学校ともめ事が起こしたことから、その混乱を收拾するために折笠が会長を引き受けたこととなります。排斥運動はあつ

たのか。事態收拾のための規約会則の改正だったのか。真相は詳らかではありません。昭和11年6月、在京卒業生訪問団が母校で大歓迎を受けましたが、団長格の折笠は当時の浅水成吉郎校長について次のように言及しています。

『浅水現校長就任以来学校の凡てがドシドシ改善せられ着々として成績の挙れるのを目のあたりに観て実に愉快に堪えませんでした。どうか現校長に御迷惑でも長く吾々の母校に止まって戴きたい。』

上記から折笠は浅水校長を高く評価していたことがわかります。また、ある同窓生の回想によれば、浅水校長は昭和12年3月、磐城中学へ転出の日、『私は、君達が可愛い。栄転と人はいうが、わしはそうは思わぬ』と言って泣いたということです。

終戦直後、折笠は『私はやむなく会長をやっているのだから相馬から早く会長を出すように』と述べ、地元から会長を選出し、事務局を相馬に置くべきことを主張していたようです。結局、折笠は昭和24年に会長を退き、相馬農業高等学校長の佐藤弘毅氏(相中第6回卒)が第2代会長に就任しました。